



TITLE:

ワーゲマン教授の『景氣變動論』

AUTHOR(S):

谷口, 吉彦

CITATION:

谷口, 吉彦. ワーゲマン教授の『景氣變動論』. 經濟論叢 1929, 28(3): 468-475

ISSUE DATE:

1929-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129720>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 三 第

卷 (十二) 第

行發日一月三年四和昭

論 叢

電 氣 稅 論

法學博士 神戶 正雄

總合社會學概念

文學博士 米田庄太郎

財產生命保險

經濟學博士 小島昌太郎

說 苑

最近の諸國幣制改革の傾向

經濟學士 島 本 融

美濃國騷擾史

經濟學士 黑 正 巖

大阪爲替會社の業務

經濟學士 菅野和太郎

雜 錄

ワーゲマン教授の『景氣變動論』

經濟學士 谷口 吉彦

通貨主義とリカードの貨幣論

經濟學士 有 井 活

地方費に對する國庫補助

經濟學士 安田 元七

東京市財政十年計畫

經濟學博士 沙見 三郎

雜 錄

ワーゲマン教授の『景氣

變動論』

谷 口 吉 彦

ベルリン大學教授、ドイツ統計局長、兼ベルリン景氣研究所長の現職にあるエルンスト、ワーゲマン氏の『景氣變動論』は、單に氏の地位から見ても、多くの期待をもつて其の公刊を待たるゝに十分であつた。いま昨秋に至つて漸く公にされた此の書を手にして、先づ何よりも感ぜらるゝことは、此の書に對する人々の期待が、まづ十分に報いられたことである。

著者の地位から當然に考へらるゝ如く、『此の書は、ベルリン大學に於ける長年のアカデミッシュな活動と、特に景氣研究所の任務に伴ふ研究との結實である。』²⁾此の書が大學に於ける理論的研究と、研究所に於

ける實際的研究との統一をなすことは、その内容を一瞥して直ちに窺はるゝ所であり、此の書の特徴の一つは、確かに此の點にあるものと思はれる。

極めて一般的な概評を下すならば、從來のドイツに於ける景氣研究は、一般に『理窟倒れ』の傾向が強い。景氣變動論と銘打つた論著で、一面の圖表すら載せてゐないものもある。之に反してアメリカに於ける景氣研究は、いさゝか『數字倒れ』の誹を免れず、數字的計算に研究の全面を奪はれてゐるものが少くない。樹を見て森を見ざるアメリカ式も、森を見て樹を見ざるドイツ式も、共に一面的な認識にすぎず、世界經濟の現實の動きを観察し、國民經濟の現段階を現實に把握するためには、いづれも不十分と言はねばならぬ。ワーゲマン氏の新著は、ドイツの『理論』とアメリカの『數字』との間に、一のジンテーゼを求めんとする一派を代表するものであつて、口を極めて所謂『理論家』を攻撃すると共に、自家の理論的系統を打建てんとする努力を見せてゐる。このことは又、景氣研究に對する氏

1) Wagemann(Ernst) ; Konjunkturlehre (1938)

2) a. a. O. Vorwort, III.

の見解から當然に來る所でもある。

『景氣變動論』は、たゞに其の對象——これまで經濟學に於て甚しくゆるかさにされてゐた對象——の特殊性によつてのみならず、更に又、就中一の方法論……によつて特徴づけられる。』研究の對象は、いふまでもなく現實の經濟、從つて運動形態に於ける經濟であり、『資本の現實の運動』であり『經濟の運動作用』である。方法上に於て『その最も重要な基礎は、經驗と歸納であり、出來得る限り精密な數學的表現を利用するものである。』

此の如き景氣研究はそれ故に、ドイツに關する限り、從來の國民經濟學に對して、重要な影響を齎らさねばならぬ。『余の見る限りに於て、景氣變動論は、ドイツの國民經濟學に對して、二重の方法に於て、之を結實せしめ蘇生せしめることが出来るであらう』と期待する。第一に、『それは歴史學派の、時に本質を失ふまでに散裂した研究方法に對して、概念及び舉證の確固たる下層建築を提供し得べく、此の下層建築

は、歴史學流が年の經過と共に多數の有力な代表的人格を失つてゐる時に於て、まず、必要である。』第二にかゝる景氣研究は、『演繹的研究方法——次第に超世間的な、多少は才氣ばつた將棋遊び……に變質して、更に好んで無益な方法的論争に大切な智力を費す所の研究方法——に對して、鞏固な現實の地盤に之を立脚せしむる』に貢獻するであらうと自任する。他方に於て景氣研究は、著者によれば『特に經濟指導の見地』に於て研究され、『私經濟學と國民經濟學との間の一種の連環として發達した』ものであるから、今日の『困難なる時代に於ける經濟指導乃至經濟政策を解決すべき重大なる任務』を之に負荷することを忘れてゐない。

二

豊富な内容を三百頁に纏め上げた手頃の一卷を先づ二大別して、前編を『一般景氣論』として理論的研究に、後編を『應用景氣論』として實際的研究に充てる。

前編は先づ『緒論』に於て『近世景氣論の成立』を論じ

3) a. a. O. Vorwort, III.

4) a. a. O. Vorwort, III.

5) a. a. O. Vorwort, III.

6) a. a. O. Vorwort, III-IV.

7) a. a. O. Vorwort, IV. (傍點は筆者による。以下皆同じ)

たる後、之を三大部門に分ち、『經濟の運動諸形式』(第一部)、『景氣諸段階』(第二部)、及び『景氣の事象系列』(第三部)を論ずる。

第一部を更に三章に分ち、『經濟的動態』(第一章)、『經濟的循環(靜態)』(第二章)、『經濟的運動の根本諸形式』(第三章)を論じ、經濟諸運動を次の如く分類する。

一、一回きりの變動(構造變動)〔a、非永續的變動
b、永續的變動〕

二、週期的運動〔a、回歸的制限運動(季節變動)
b、回歸的自由運動(景氣變動)〕

第二部『景氣諸段階』は四章より成り、『從來の段階區分』(第四章)を論じて、ハアヴァドの五段説、シュビートホッフの三段六節説に對して、四段説を主張し、各段階に對して『貨幣側』および『貨物側』の特徴を決定する。以下の三章は、『長期波動』(第五章)、『戦前の景氣循環』(第六章)及び『景氣狀態と景氣緊度』(第七章)に充てる。

經濟運動の形式的分析と時間的分析との後を承けた

第三部は、景氣の『實質的内容』をなす事實的分析に充てられ、『事象系列の形式的類別』(第八章)、『並行運動と束線運動』(第九章)、『後續運動』(第十章)及び『反對運動』(第十一章)に就て述べる。

後編『應用景氣論』は四大部門に分れ、『景氣指標』(第四部)、『部門運動と其の錯綜』(第五部)、『經濟の總運動』(第六部)及び『景氣原因の問題』(第七部)より成る。

第四部景氣指標論は、『一般景氣指標』(第十二章)、『經濟の各部門に對する指標』(第十三章)及び『景氣研究所の指標方法』(第十四章)の三章より成り、此の最後の章に於て、ハアヴァド以下の『單一方式』(單線によると複線によるとを問はず)を斥けて、彼れの主張する『合序主義』¹²⁾を高調する。

第五部は『合序主義と觀察目標』(第十五章)、『農業景氣と工業景氣との關係』(第十六章)、『景氣動搖に於ける外國貿易』(第十七章)、『信用の景氣階梯』(第十八章)、『景氣の經過に於ける物價と販賣』(第十九章)の

8) a. a. O. Einleitung, S. 1.
9) a. a. O. Einleitung, S. 1.
10) a. a. O. Vorwort, IV.
11) Einheitsformel.
12) Ordnungsprinzip.

五章を含む。

『經濟の總運動』を取扱ふ第六部は、『景氣の診斷^{ダイアグノーシス}と豫斷^{プログノーシス}』(第二十章)、『景氣の總表現としての就業程度』(第二十一章)、『無景氣經濟と景氣安定』(第二十二章)、『景氣政策の方法』(第二十三章)の四章より成る。

第七部『景氣原因の問題』は、普通には最も興味を集中する部分であるが、著者の立場からは殆んど重要視されず、『因果諸説の分類』(第二十四章)と『世界經濟の趨勢』(第二十五章)を包含するに過ぎない。

以上を以つて前後二編を終へ、最後に『景氣統計の技術に關する手引』と題して、『方法及び材料』に關し五十余頁にわたる極めて有益なる四つの附録を追加してゐる。此點も亦、見逃すべからざる本書の一特色と言へるであらう。

三

いま是等すべての内容を詳細に紹介し論評することは出来ない。茲ではたゞ彼れの見解の特徴を見るに足

る相關聯せる二つの點を明にするに止める。一は彼れの理論的研究に關し、二は彼れの應用的研究に關する。

彼れは自己の根本的見地を明らかにするため、之をアメリカの景氣研究及びロシアのそれと對照する。

彼れに従へば、『此のアメリカ型を特徴づける點は、それが經濟生活を主として機械^{メカニスム}として、強大な機械^{マシーナリ}の關として觀察し、其の進行は算數家的方法の助によつて表現され且つ豫測され得るとなす點にある。』此の

如き見地に立つ時は、當然に『單一方式』に向はねばならぬ。『かゝる單一方式を探索し、一般指數若くは單一指標を探索することが、それ故にアメリカの研究にとつて特に特徴的な點である。』單一方式を求めめるためには、之を妨害する諸要素——一般傾向、季節變動——を消却することが重要となる。

ロシアに於ける研究は、一九二〇年創設の當時から、既にそれが國家の經濟指導と密接に聯結せる點に於て、アメリカのそれとは先づ組織上に相違あること

1) a. a. O. S. 8.
2) a. a. O. S. 8.

を示す。機能上に於ては『ゴスプランの編成、即ち年々の財政豫算の外に、政府の經濟政策の方針を與へる所の國民經濟豫算の編成にとつて、一の重要な構成要素を成してゐる。』従つて『ロシア景氣研究所の活動目標に於ける特殊の特徴として、それが特に著しく一般的經濟的發展といふ大問題に關心してゐることを注意すべきである。』アメリカの方法に於ては、『一般傾向』は消却さるゝに反し、こゝでは反對に之が重要視されねばならぬ。算數家的方法に據る點は、兩者に共通であるが、『併し此の場合恰かもロシアは、數學的經濟統計の領域に於て、極めて重要な多數の獨立の業績を誇らかに所有してゐる。』

一九二五年に創設されたドイツの研究所もまた、『最も重要な形式的根抵として、數學的方法の應用を承けつゝだ。』が併し『此の場合、ドイツに於ては、他の諸國に於けるそれとは、本質的に區別さるゝ研究方針をとつた。』アメリカの言はゞ『技術的態度、ロシアの『天文的』方法に對して、『ドイツの研究所は言は

ば醫學的原理、又はよりよくは有機的——生物學的原理を代表する。』然らば有機的——生物學的原理とは何か？

四

此の見地に於ては、『國民經濟は一の有機體として見える。……經濟は一の生きた有機體であり、たゞに動植物の生物體と同じく、その總ての部分の密接な聯結——その總ての機能の密接な協同、相互關聯から起る聯結——を有するのみならず、更に一の特質、運動の自律性として表現し得べき特質が加はる。この特質は先づ第一に運動作用に表はれる。……有機的運動作用の經過、方向、期間および密度は、それ故に機械の精密なタクトとは反對に、多少自由なりズムの性質を有する。』

『經濟の有機運動の自律性は、經濟が外部からの刺激や影響を如何に受取るかの方法を觀察する場合に、最も明らかに見ることが出来る。』即ち此の場合、外部的影響は常に單なる刺激として作用するに過ぎ

8) Das organisch-biologische Prinzip.
9) a. a. O. S. 9-11.
10) a. a. O. S. 11.

3) O. S. 8.
4) a. a. O. S. 9.
5) a. a. O. S. 9.
6) a. a. O. S. 9.
7) a. a. O. S. 9.

ず、經濟有機體は之に獨立の加工を加へて攝取する。従つて又、政治事變、戦争、天災等の如く、その性質と程度に於て甚しく異なる外部的影響を受けても、『經濟は恐らく常に同様の方法に於て運動するであらうこと、恰も心臓が全く異なる手段——化學性たると物理性たるとを問はず——によつて、同様の反應を示すと同じである。』¹¹⁾

然るに『經濟の機械的見解に於ては、外部的影響の種類と強度を計算して、經濟に對するその意義をば、一つの方程式で表はさうとする……之に反して有機的原理による觀察は、此の處置を排斥する。蓋しすべての經濟的運動は、根本的に自律性のものであり、此の意味に於て内生的のものと見られる。従つて外部的影響と内部的運動との間には、何等の計算し得べき等量關係をも認めないからである。たゞ此の場合、經濟運動の最後の刺激、最後の動因が外部より來ることの可能性は、決して之を拒むものではなく、否恐らくは之を必要とするであらう……』¹²⁾かくて著者

は、彼れの指導原理たる有機的——生物學的原理の含む『テーゼ若くはよりよくはヒポテーゼ』として、次の二項を要約する。

『一、經濟の總ての部分は、密接なる機能的聯結に於て存在する。此等の部分は緊密なる一のシステムを作り、此のシステムは其れ自身の法則に支配される。

『二、外部からの影響は、それが非經濟的領域から來ると他の經濟體から來るを問はず、單に刺激として作用するに止まり、其の刺激が經濟有機體に於て自律的な運動を惹き起す。』¹³⁾

五

理論に於ける特徴は、必然に應用論に於ける彼れの特徴に導く。こゝではアメリカの單一方式を排斥して『合序主義』^{オールドマン、プリンチン}を主張する。蓋し有機觀に従へば、經濟體の『生活發現は、決して一つの點から理解さるべきでない。従つてたゞ一つの經濟指標を利用して經濟診斷をなすことを忌避する。』¹⁴⁾經濟指標の景氣判斷に對する關係は、恰かも醫者の診斷に於けるが如く、一つの對診の根柢には、多數の診斷法が潜在せねばなら

16) O. S. 126-127.
17) a. a. 129-130.
18) a. a. 127.
19) a. a. 127.

11) S. 11-2.
12) O. S. 12.
13) a. a. 9.
14) a. a. 10.
15) a. a. O.

ぬ。『豊富な一つ／＼の觀察から診斷が立ち、この診斷から豫斷が立つ』¹⁵⁾のである。

實際の經驗に徴するも、『經濟の進行なるものは、若し吾々が單一方式に限る時は、たとひ其れが一般指數及び一般的複線指標の場合に於けるが如く、包括的な多數の材料に基づく場合でも 十分に之を判斷し得ず、また正確に之を知ることとは全く不可能である。此の方向に於ける總ての試みは、今日まで失敗に歸してゐる』¹⁶⁾

そこでドイツ研究所の努力は 多數の經濟指標より成る一つのシステムを作り上げるにあつた。その結果今日までに作り上げた指標は、(一)生産指標、(二)就業指數、(三)在庫指標、(四)國內市場の指標としての外國貿易、(五)事業指標、(六)信用指標、(七)三市場指標、(八)物價指標であり、是等は何れも包括的な多數の原材料に、複雑な加工を加へた結果であつて、少なからぬ努力と勞費の賜である。¹⁷⁾それは尙ほ十分な材料を網羅せざる點に於て不完全ではあるが、併し此の

程度でも既に『是等の指標は、研究所をして、景氣診斷および景氣豫斷までもなすことを得させ、これ等の診斷及び豫斷は、今日まで事實上の景氣經過によつて、後から後へと十分に確證されてゐる』¹⁸⁾のである。

是等の指標は又、たゞ材料のあるに任せて出鱈目に作り上げたものではなく、此書の最初に論ずる所の著者の靜態的分析に照應して、一定の經濟秩序に應ずるものである。¹⁹⁾いま是等一列の指標に基づいて、現實の經濟狀態を判斷するためには、先づ『景氣經過の模型的様相』を示す所の『景氣表式』²⁰⁾十三個のシェーマより成る)を作り、現實の諸指標を之と對照せしめねばならぬ。この場合そこには常に一定の偏倚がなければならぬ。それ故に『景氣診斷のためには、恰かも此の偏倚に注意することが、「平常的」運動經過を設定することよりも、時により重要である……景氣が將來如何に續くべきかは、此の偏倚から一定の程度まで推論される——この限りに於て、一般に豫斷が可能である』²¹⁾と言ふ。

20) Konjunkturschema, a. a. O. S. 140-141.

21) a. a. O. S. 142.

22) Hrsg. von Karl Diehl; Konjunkturforschung und Konjunkturtheorie. (1928) (Schriften des Vereins für Sozialpolitik, 173 Bd.)

之を要するに、理論に於ける『有機的——生物學的原理』と、之より必然に來る所の應用論に於ける『合序主義』とは、ベルリン研究所の一貫せる根本的特徴であり、同時に此書のシステムを流るゝ生命である。いま之に對する批評は姑くおき、斷片的理論の羅列、過ぎないものや、教科書風の説明に終始する雜著の間にあつて、此書が一段の光彩を放ち得る所以は、主として此の點にあるものと思はれる。(四、一、一〇)